

文化研究と神話テキスト

藤崎康彦

はじめに 神話研究の意義

北米先住民のいくつかの部族には「ベルダーシュ」と西欧人が一般的に呼ぶ、女装をして女の仕事をする男がいたと伝えられている。そしてナバホ族にはそれと同じ存在で、ナバホ語で「ナドレ」といわれる人がいたとされる。ナバホは文字を持たない民族であるので、文字を持つ外部の観察者が記録を残していない時代については、直接それについて知ることはできない。そのとき口頭伝承 (oral tradition) あるいは民間伝承 (folklore) が一つの手懸りとなる。今回跡見学園女子大学文学部紀要に「ナバホ族創世神話の中のナドレ―宇宙観とジェンダー研究

序説―」と題して、神話でナドレがどのように描かれているか、その姿は現在いわれている「第三のジェンダー」として理解できるかなどを考察した文章を書いた。

そこでは紙幅の制約から直接のテーマに集中し、神話テキストを文化研究の資料として用いることの理論的諸問題については特に議論する余裕がなかった。本稿では、ナバホの創世神話あるいは起源神話のテキストを用いて研究する際に出てきた問題点を考えることを通じて、より一般的な考察に向かいたい。

人類学では神話研究といえばレヴィ・ストロースの「神話論理」の研究があまりにも有名だろう。しかし、それはむしろ

人類の普遍的な論理の構造に関心を向けたもので、北米先住民の神話も沢山資料として用いてはいても、彼らの個別文化の具体相に関わるものではない。北米先住民の各部族の神話が彼らの各々の生活を反映したものであり、それらの神話を研究することが個別の文化の研究に有意義であると考えたのは、ボアズをはじめとするアメリカの研究者達であった。

例えばライチャードはゴッダードが採録したナバホ神話の序文で、これやその他の神話テキストの中に民族誌的な素材を抽出することができるのではないかと、希望を述べている (Goddard 1933:7)。スペンサーは一九四〇年時点でのナバホの神話資料を通覧し、様々な項目につい

て共通点をまとめ、それらと実際の民族的資料との対応関係を丹念に検討した作業を発表している。スペンサーはライチャードと同様に、起源神話は一定程度社会生活を反映しているという理論的前提を述べている (Spencer 1947: 11)。

私の作業もこれらの前提を共有している。むしろもう少し関係を相互作用的に考えていて、神話をその文化の規範的価値が表れているものとして想定し、それが具体的な生活を形成している面もあるだろうと思う。神話と生活文化の反映あるいは影響関係は、むしろ双方向的なものであるという前提をとりたい。その結果今回の作業を通じて次の三つの問題が、テキストと文化の関係を考える際に、あるいはその作業の前提として、理論的な反省を行うべき諸点として生じてきた。

論点一 語りのテキスト化と

編集の問題

ナバホの創世神話を読むとき私が最初

に手にしたのはゾルブロッドのもの (Zolbrod 1984) だった。ただの人類学の研究資料というより、文学作品としての価値も高いものにしようとゾルブロッドが入念な考証をもとに仕上げた本で、読みやすさは優れている。そのせいか、日本語にも訳されている。(ただし原著にある人類学資料として重要な厳密で豊富な注がこの翻訳にはないことや、その他の理由で研究資料としては十分ではない。)

ゾルブロッドのこの本はマシユーズの *Navaho Legends* (Matthews 1994) の改訂再録ともいべきもので、全くのオリジナルな作品ではない。ゾルブロッドがマシユーズを改訂しようとした根本動機は二つある。一つは、記述され印刷されたその形式への疑問である。ゾルブロッドは、伝説は本来語られるものであり、ナバホ族の創世物語も儀礼などの場で伝承者が語ることに本質であると考える。マシユーズは韻律性、間、独特の語り口など、詩としてあるいは物語として語ら

れる際の豊かな特徴を無視して、話の内容あるいは骨組みだけを紙面にいわば押し込んだのであり、それはナバホの伝承物語の本質の重要な部分を失わせる行為だと、ゾルブロッドは批判する。

確かに読んでみてこのゾルブロッドの意図は理解できるが、しかしこの試み自体は今回の私の目的に対して特に意味を持つものではない。これまでの昔話研究などと同じく、主要な関心はモチーフに置くとするならば、内容が損なわれていなければそれで良いのである。むしろ私の関心からはゾルブロッドの、マシユーズを改訂するもう一つの動機である、性的なテーマの扱いがより大きな問題となった。ゾルブロッドは、マシユーズは「ビクトリア朝」的な性道徳の持ち主であり、ナバホの話者が語ったであろう性的な色彩のエピソードなどを刊行されたテキストから取り除いていると批判する。そのために、本来の語りの中にあつたはずの、そしてマシユーズが本文からは省

いてしまったような、説話の登場人物達の生き生きとした性的な行動、男女間の様々な交渉などをゾルブロッドは補って再構成しようとしている。

男女の関係の一つの例として、ナホバ族が現在の地上の世界に「出現」する以前の地下の第四世界において、男女の「分離」が生ずるきっかけとなる重要な言い争いのエピソードの扱いを、二人の資料それぞれで見してみる。

その部分をマッシュューズは次のように描く。『最初の男』は第四世界でキサニ族は別にして、これら全ての人々の首長であった。彼は腕の好い狩人であったので、彼の妻すなわち『最初の女』はとても太っていた。ある日狩りから彼はすばらしく太った鹿を持ち帰った。『最初の女』はその肉を煮て二人は満足のいく食事をした。食べ終わったとき、『最初の女』は脂のついた手を服にぬぐい付けて夫をひどく怒らせることを口にした。彼らはそのことで言い争いをし、ついに『最初の男』は火を飛

び越えて家を出て、一人で一言もしゃべらずに夜を外ですごした (Matthews : 71)。」そして巻末に注を付し (注32 Matthews : 218)、なぜ夫をひどく怒らせたのかが分かるように書いている。夫の働きに感謝せず、夫の労働を動機づけたであろう自分の性的な魅力に「ワギナよありがとう。」といって感謝したのである。男達はワギナに惹かれて働いているだけだというわけである。

このマッシュューズの本文と注に描かれているやりとりによつて、何が原因で「夫をひどく怒らせる」ことになったのか、ナホホの社会や文化のあり方を十分に私たちは理解できる。例えば、狩猟採集を基本としながらも農耕が生活の中に入ってきていること、男女の分業が行われていることなどである。そして、性を媒介にした男女の緊張が物語を展開させるモチーフ (動機) として明瞭になってくれば、私の分析には十分である。しかし、注がない場合は、マッシュューズの性的

ニュアンスの抑制によつて物語自体の内容が変質してしまうことも起こりうる。例えば次のような場合である。

この男女の「分離」が何年か続き、女たちが食物に窮して来たとき、女たちは男たちへの恋しさにも促され、もう一度一緒になりたいと哀願するようになる。男たちも女を恋しく思う気持ちは同じである上に、このまま分離を続けていては子孫が生まれず自分たちの未来はないことに思い至り、女たちを男の側に連れてきて再会する。その決断に至る過程をマッシュューズは「最初の男」の自主的な判断であるかのように描く。すなわち、このまま分かれていたら我々一族はどうなるかと考え、周りの男たちの意見を聞くと、男たちは一族が絶えることはよくないと答える。また、女たちが飢えているのに自分たちの側には食べきれないほどの食べ物があつても意味のないことだという。それで「最初の男」は男たちを岸にやり、「最初の女」を呼び出させる。「最初の男」

は「最初の女」にまだ女たちだけでやっていけると思ふかとたずねると、「最初の女」は夫たちがいなければやっていけな
いと答える。そこで「最初の男」は再会
を決断するのである (Matthews : 72-73)。

この部分に対する注33 (Matthews :
72) で、男女の分離の間、男女共に性的
な様々な逸脱行為をおこなっていたこと
をインフォーマントが事細かに語ったと
マシューズは述べている。しかし、その
逸脱がある男が行なおうとしているとき
に、フクロウが現れて分離の行く末に思
い至らせて分離をやめるよう諭し、「最初
の男」を説得するように男に命ずるエピ
ソードについては特に触れていない。こ
れに対して、ゾルブロット版ではそのエ
ピソードを詳しく描き、「最初の男」が周
りの意見に押される形で再会を決断する
ように語っている。

ここで問題としたいのは、「ビクトリア
朝」的性道徳が邪魔をして性的な逸脱行
為のエピソードを削除してしまったかも

知れないことではなく、マシューズ的な
扱い方では、主人公である「最初の男」
の主体性が強く出て、近代的な、心理的
な物語りのようなニュアンスに変質して
しまうことである。これに対して、当事
者の立場を超えた知恵あるもの（ただし
ナバホでもフクロウは西洋と同じように
知恵を連想させるものなのは、私が見
た資料の範囲では確かなことは言えな
い。）が理を説いて主人公たちはそれに従
う方が、神話や伝説の話の展開としては
自然である。話の駆動力は「出来事」で
あるはずであり、登場人物の心理ではな
いからだ。

確かにマシューズは注からもわざと省
いたのではなくて、彼のインフォーマン
トはこのフクロウのエピソードを語らな
かったのかも知れない。いずれにしても
ゾルブロットはそれを他の資料（おそらく
Haile 1981b の The Curly To Aheadini
の語り）を用いて補った。それによって、
物語としてはゾルブロットの方が統一が

取れた優れたものになった。「分離」は当
事者の意図を超えた構造的なものであつ
た。これに対応して、「再会」も当事者の
思惑を超えた必然として促されたのであ
る。これは性的なエピソードを描かなけ
れば表現されなかったことである。

しかしここで資料の正確さに関わる問
題が生じる。ゾルブロットは行き過ぎた
編集をしたのであろうか。マシューズの
インフォーマントが語ってもいない話を
付け足して、誰が語ったわけでもない物
語を作ってしまったのだろうか。

マシューズの本は他のいくつかの資料
にあるような、ナバホの語りを音のまま
文字に写したテキストがなく、いわば英
語の翻訳しかない。しかしそれ以上に問
題なのは文字への転記であれ翻訳であれ、
そのテキストと語ったインフォーマント
との対応がはっきりしないことである。
話をしてくれた主たるインフォーマント
（複数）の名は分かっているし、どうい
う人かもマシューズは書いている (Matthews :

5659)。また、インフオーマントの違いに従ってバージョンAとバージョンBとマシユーズによって名付けられたものがあり、注でもその異同に触れているところは多いのだが、しかし本文は基本的にバージョンAに基づいているのかといえ、それもはっきりしない。ゾルブロッドですらマシユーズがどのようにしてこの本の基になる資料を集めたのかよく分からないといっている。私たちはそもそもテキストの成り立ちを知らないのだ。

つまり編集が問題になるのはゾルブロッドではなくてマシユーズの段階でなのだ。話者の語りの内容を注に回してしまふこと自体が編集だ。スペンサーが一九四〇年までに発表された創世神話のテキストをその内容によって比較整理してみると、マシユーズのものが飛び抜けて内容が豊富である (Spencer 1947)。スペンサーが立てた項目のほとんどをマシユーズ版は含んでいるが、他のものはヘイル版がそれに次ぐくらいで、多くは一部分

しか含んでいない。マシユーズの豊かさは実はいくつかのテキストを編集したことから得られたものかも知れない。つまり網羅的であることは自然なことではなく、一人の話者に依存した場合、必ず偏りが出てくるものであると考えた方が適切だ。ここから次の二つの論点が導かれる。

論点一 テキストの多様性と

神話の範囲

マシユーズはナホバの起源伝説は四つの明瞭な部分あるいは章に分かれるとしている。1、出現の物語、2、第五世界における初期の出来事、3、戦の神々、4、ナバホ民族の発展、である。起源伝説すなわち創世神話の骨組みはこのように四部から構成されていることは異なる話者の間で共通の理解であったとする。しかしそれぞれが多少なりとも互いに異なる内容を話したとしたら、創世神話の全貌はどのようなものとして理解できる

だろうか。つまり、はじめに何か完全で全体的なものがあったとして、それが語り伝えられるうちに次第に形が崩れていったようなものなのだろうか。そうであるなら様々なバージョンやバリエーション(変異型)を比較することで原型を再構成することは可能かも知れない。しかしそういうものであるとの保証はない。保証がないときにこのマシユーズが定着させたものが例えば「完全」なものだと、どのようにして判断することができるのだろうか。

マシユーズ自身は次のようにいう。「広い地域にわたって薄く散らばって住む文字のない民族において予想されるごとく、ナバホの伝説には多くの変異型がある。どの二人として同じ話を全く同様に語ることはないだろう。…(一部省略)…これらの変異型にもかかわらず、物語の語り手は、より重要な事柄については実質的に一致しているのである。…(一部省略)…創造伝説のいくつかの版は、完全

にあるいは部分的に、記録できた。ここに刊行する版はその中でもっとも完全で、範囲が広範囲にわたり、話が一貫したものであるがゆえに選ばれた。他の諸版はそれを補うために使われた (Matthews : 50)。¹つまり範囲の広さと首尾一貫性が「完全」さの判断の基準であると考えることができる。しかしこの二つの基準のいずれも、テキストそのものに内在的にある特性ではない。他の類似的テキストとの比較によってのみ相対的に判断できるものである。この基準で測っていずれかのテキストを一つ採るならともかく、いくつかのテキストを合成したなら、それはテキストから離れて編集者が超越的で最終的な作者になってしまったことを意味するであろう。それはナバホの神話なのだろうか。もし後世ナバホの神話として幼いナバホの子供達が伝統学習のために部族の学校などで学んだとしたら、それは、偉大な研究者によって文字にされたというような、神話そ

のものとは関係ない権威によって学ばれるということになるのではないか。¹

実はこういうことは文字のない文化にはしばしば起こることで、私自身も経験している。一九七〇年代のことであるが、ミクロネシアのポナペ (ポーンペイ) で神話を話してくれるようある人に頼んだら、それはアメリカの人類学者が既に調べて印刷されているからそれをご覧下さいといわれたことがある。準備の段階で私は当然読んでいる論文である。質問者をうるさがつて追い払うためにそういったのではない。明らかに、既に権威として知られているものがあるのに、あえて自分が何か語ることに對して気後れを感じているのであると私は感じた。ゾルブロッドが大変な努力でやろうとした作業も、そもそも神話を語る場 (儀礼) がなくなり、文字に定着されてしまえば、生き生きとした多様性や即興性や創造性などが失われてしまうことに対しては無力であるといえよう。人々の日常生活から

遊離したところで「正典」を作ることになりかねないのである。

論点三 同一の話者における

モチーフや細部の多様性の理解

論点二は異なる話者間の多様性に関するものであった。ところが、多様性あるいは変異は同一の話者の間にもあるのである。サンドバルはオブライアンに一九二八年 (O'Bryan 1956) に、ゴッダードに一九二三年と二四年 (Goddard 1933) に創世神話を語っている。二つの版の間には、今回問題にしている「出現」の中の「分離」のエピソードに関していえば、ナドレの登場する場所やその性格付け、「トルコ石の少年」が「hermaphrodite」すなわちナドレか否かの性格付け、「分離」にいたる男女の不和の原因などで違いがある。

同様、グイシーン・ビゲ (Guishien Bige、あるいはGishin Bive) も二度語っている。実は最初の語りの相手が誰な

のかはつきりしない (Stephen 1930)。二度目はヘイル神父である (Haile 1981a)。一度目をⅠ、二度目をⅡとすると、Ⅱは格段に長い。それはヘイルが聖職者であるので、語り手は積極的に語る気になったのであろうとレヴィはいつている (Levi 1998:41)。またこのヘイルの採録はノート段階のものがウイールライトによって先に刊行された。しかしその後ヘイル自身が推敲したものが改めて出版されたのである。

これら二つのうちⅠでは「分離」の原因は首長の妻の家事怠慢である。子供も二人いて家庭を顧みないで賭け事をして妻は遊んでいる。ナドレについては「分離」の過程でしか言及されない。しかしⅡではナドレは「分離」以前に独立の存在として登場している (Haile 1981a:31-32)。「分離」の状況についてはⅠと同じである。ナドレの数も違う。Ⅰでは四人いる (Stephen 1930:98)。Ⅱでは一人しかいない (Haile 1981a:44-45)。「分離」

時にナドレが男達と一緒に来ることを求められたとき、Ⅰでは渋々従っている。Ⅱでは女といたいとは思わないとむしろ積極的にいう (Haile 1981a:42)。Ⅱではナドレの地位は高い。人々に期待されて「女の仕事」以外の独自の働きをする。例えば首長が妻にないがしろにされて口を閉ざしてしまったとき、様子を見に行く使者の役割を果たす。いわば媒介的な役割である。Ⅰではそのようなことはない。

このように、私が分析の対象としている狭い範囲においてもかなりの差異がある。同じ話者であるということにこだわると、この間の食い違いは無視できない問題となってくるかも知れない。レヴィのいうことが正しいとすると、話は相手によって変わってくることになる。ひょっとしたらナバホの世界でナバホを聞き手として語る場合にも毎回少しずつ話が異なっているのであるかも知れない。当事者による、語るということの意味に対する証言がないので判断はできないが、

あり得ないことではない。仮にそうであるとするなら、語られたものを文字に定着したテキストは語り手の同一性から独立して、一回ごとに独自の、それ故価値としては独立のものを見なした方がよいということになる。

まとめ

論点一の語りのテキスト化における編集の問題は、論点三のように考えてくと二次的な意味しか持たないようにも感じられる。誰に話すかによっても、話は変わるかも知れないのである。つまりある語りがあったとして、それを語りにつぎるだけ近づけて文字に転写することは、語りそのものが場面で変化する可能性を思えば、テキストの意味を考えると根本的なものとはいえないかも知れない。一般にインフォーマントにインタビューすること自体に当てはまることなのだが、語りはコミュニケーションのなかで行われる。誰に、どういう時、どのような状

況で語ったかで内容もスタイルも変わる

のだ。話者の動機付けにもよる。フィシユラーは外部の調査者にその文化の人が語ってくれるとき、三つの動機があると
いう。これは北米先住民の場合と考えて
良い。一つは周辺人としての親近性であ
る。その文化の中では周辺の位置に疎
外されている人が調査者のよそ者として
の立場に惹かれて話をするというのであ
る。二つめは調査者から提供される何ら
かの報酬目当てである。最後は固有文化
が失われようとしているときそれを調査
者に託して保存しようという動機である
(Fisher 1953:1)。

このようにテキストを評価する場合に
は、話者の動機付けも含めてそのテキス
トの採集の状況が詳しく分かっていた方
が好都合である。そのテキストの性質を
分析者が評価した上で、後は対等なもの
として比較することなどは当面の課題次
第である。ただし、今回のテキスト群に
はそのような情報はほとんど含まれてい

なかつた。

今回の私のような課題を考える場合、
テキストの扱いや比較にはいくつかの方
法がある。例えばレヴィの比較神話学的
研究のように、ある一つを標準的なテキ
ストとして定め、それとの関係で他のも
のを評価するような方法がある。オブラ
イアン・サンドバル版のテキストはサンド
バルが特定の儀礼神話の語り手ではない
ので、偏りがないと想定してレヴィは選
んだ。比較の原器には癖がないことが必
要であるという立場だろうが、他と水準
の異なるような、質的な違いがあるとは
これだけではいえない。

また、マッシュューズ版とゾルブロッドの
作業のように、できるだけ包括的な一つ
の物語に大きく合成して、それを基本と
して考える立場もある。ナバホの創世神
話そのものに関心を持つなら、一つの決
定的なものがあった方が分り易いが、
しかし矛盾して一つにまとめてみようの
ないものが沢山こぼれ落ちることになる。

今回私が採ったのは、現時点で利用可
能であった全ての資料を通観して、大づ
かみであれ共通性を理解した上で細部の
比較を行い、ナドレを考察する方法であ
った。ナバホのみに関心を向け、問題に
よっては細部にも注目するためには
これが適当であると考えたのである。し
かし、そうであつても比較しているテキ
ストの性質について、最後まで様々な思
いが湧いてくるのをとめることはできな
かつた。

〔謝辞〕

本稿は平成十七年度跡見学園女子大学国内留学制
度による留学の成果の一部である。機会を与えて
くださった学園および留学先の明治大学にお礼を
申し上げる。

註

(1) 現実是一部ここに述べたようになってい
ると同時に、一部は少し異なった事態にもなっ
ているようだ。本稿を脱稿の後『風の民 ナ
バホ・インディアンの世界』(猪熊二〇〇三)

の存在を知り閲読した。これは猪熊氏がナバホ族立大学である「ディネ・カレッジ」のニューメキシコ州の分校に留学して、ナバホ織をはじめナバホの言語や口承史などの伝統文化を学んだユニークな体験を描いたエッセイである。事実を正確に理解し記録しようという氏の姿勢によって、ナバホの現在についての価値のある報告となっていると感じ、興味深く読んだ。

氏の紹介によれば「ディネ・カレッジ」には「ナバホ語」はもとより、「ナバホ口承史」「ナバホ史」「ナバホ文化」など沢山のナバホに関する講座があり、本稿で扱ったナバホの神話もちろん講義されている。但し現在と切り離された「神話」としてではなく、現在のナバホにそのままつながら生きた歴史としての「口承史 (oral history)」として講じられているとのことである。私が本文で想像したようにナバホの子供たちが学んでいるわけではないにせよ、ナバホの人々が「伝統学習のための部族の学校」で創世神話を学ぶことが現に行なわれていることが、猪熊氏の報告で明らかになった。

しかしその神話(口承史)のテキスト(教科書)は「白人」の作成したものは使われて

いないようだ。口承史のテキストは「白人の書いたものではない唯一のもの」を使用したとのことである(猪熊・267,68)。それは次のような理由であるようだ。「バナリ先生は、ナバホ文化の根幹としての創世神話の説明に、ナバホの学者が編纂したものを使用した。バナリ先生いわく、『白人の書いたものには、信用できないものがあるからね』(同書・18)。

これはもちろん偏狭で感情的なナシヨナリズムに基づくナバホの発言ではない。従来のナバホ文化に関する著作は白人が英語で書いたものが多く、それら白人たちのナバホ語の理解が十分でないために、ナバホの概念をゆがめて伝えている場合があることを猪熊氏が指摘し、ナバホが英語で書く方が誤解を少なくできるのではないかと考えを述べている脈絡において、当事者ナバホからみた従来の白人の著作に対する評価を、猪熊氏が引用した部分である(同書・180,81)。

つまり、白人によって対象として記述されるだけの存在ではなく、ナバホ自身がナバホの文化を主体となって語るようになった状況がここでもうかがわれるのだが、しかし、本稿で考察したテキストの問題は本質的にやはり残っているのではないかとも思われる。例

えば先に引用した「ナバホの学者が編纂したもの」の性質は氏の記述からは分からない。何をどのように編纂したのであるか。編纂対象の元の資料はどのようなものであるか。ナバホがナバホに直接語ったものを用いたのであろうか。それとも私が参照したような「信用できないもの」も混ざっている可能性のある、白人の残した資料を用いたのであろうか。そうであれば、どのようにして「信用」できる部分とそうでないものを選び分けたのであろうか。

例えば創世神話において、地下の世界が四つで現在のナバホの世界が五番目の世界であるとの理解と、地下世界は三つで現在は四番目とする理解が、このような知識を伝承している現存の「メデイシン・マン」達の間でも並存しているようだ。それを猪熊氏は次のように言う。「口承史なのだから、この程度の振れはやむを得ず、議論しても始まらない。ただし対外的には、『現世は四番目』で統一している」(同書・266)。「対外的」とはオフィシャル観光パンフレットとか、冬季オリンピックのナビリオンなどの表示でのことをさす。さらに現在のナバホの直接の祖先である「チエンジング・ウーマン(「変化する女」と、

神話のバージョンによってはその妹とされる「ホワイト・シエル・ウーマン（「白貝の女」）」については、同一存在とみなす人が猪熊氏の周囲の権威者には多かったようだ。「ナバホにとって最も大切な聖母が二人もいるハズはないという」（同書：266）理由らしい。

しかし、これは現在の価値観で「歴史を書き直す」ことであるかも知れず、もともと「そもそも「伝統」とはさうして創られてゆくものだとも言えよう。いずれにせよ、このような編纂の行為は「正典」を創ることになりかねないのではないかと感じる。このような、バージョンによる多様性については、一方を是とし他方を否とするいわば最終審級がどこにあるのか不明である点は、相変わらず問題として残っているのである。

参考文献

- Fisher, Stanley A. 1953. "In the Beginning: A Navaho Creation Myth." *Anthropological Papers* 13. University of Utah, Department of Anthropology.
- 藤崎康彦 二〇〇七（刊行予定）「ナバホ族創世神話の中のナドレー宇宙観とジェンダー研究 序説―」『跡見学園女子大学文学部紀要』第

40号

- Goddard, Pliny E. 1933. "Navajo Texts." *Anthropological Papers of the American Museum of Natural History* Vol. 34.
- Haile, Berard. 1981a. *Upward Moving and Emergence Way*. Lincoln and London: University of Nebraska Press.
- Haile, Berard. 1981b. *Women versus Men*. Lincoln and London: University of Nebraska Press.
- 猪熊博行 二〇〇三『風の民 ナバホ・インディアンの世界』東京 社会評論社
- Levy, Jerrold E. 1998. *In the Beginning*. Berkeley: University of California Press.
- Matthews, Washington. 1994. *Navaho Legends*. Salt Lake City: University of Utah Press.
- O' Bryan, Aileen [1956]1993. *Navaho Indian Myths*. New York: Dover Publishing, INC.
- Spencer, Katherine. 1947. "Reflections of Social Life in the Navaho Origin Myth." *University of New Mexico Publications in Anthropology* no. 3.
- Stephen, Alexander M. 1930. "Navajo Origin Legend" *Journal of American Folklore* Vol.43, p.p.88-104.
- Zolbrod, P. G. 1984. *Dine bahane, The Navajo Creation Story*. Albuquerque: University of New Mexico Press.